

紹介した「高野佐三郎剣道遺稿集」に次のような文章がある。「敵と相対すれば必ず撃たんとか、突かんとかする念が起るものであります。その念慮に囚われてはならぬのであります。我が体をすべて敵に任せて、敵の好む所に従って勝ちを求めないのであります。敵の好む所に任ず時は必ず敵の守備に隙を生ずるものであります。我が心に凝り固まつた所なく、明鏡の如く明らかであつて、初めて懸待一致の

京都大会今昔《愚感》

盛岡博通
（前薩摩川内市剣道連盟会長 七十三歳）

編集子の益田と木下文男先生は、お隣の鹿児島県薩摩川内市剣道連盟とはご縁があり、長らく稽古や試合参加などで交流している。今回、薩摩川内市剣道連盟の前会長と現会長のお二人からご寄稿を頂いたので掲載します。鹿児島



「十年一昔」、こんな言葉がある。

平成十年大会を観戦して、平成二十一年大会に観客として足を運んだ。過ぎてしまえば十年の時間は永いようで短いような、自分はどうやって来たのかさえ疑問に思う一昔である。五月旬は毎年、春から夏に季節が移り変わる最も

技に熟し、敵の技の隙に乗じて、我知らず撃ち込んで勝ちを得るものであります。敵が斬られに寄る所を斬り、突かれに来る所を突くのであつて、そこに無量の技があります。無理に勝ちを求めるとは及ばないのであります。」と説いている。これを私たちが実践できるか否かは別にして、まさしく現代剣道にそのまま通用する理論であります。古人の教えをかんがえる、つまり稽古、とはよく言ったものです。

い、すばらしい武徳殿界隈の風景がある。大阪の息子のところから電車を乗り継いで行く車窓から眺める五月の空は、鯉のぼりもあちこち目につき、実にいいものである。三条駅から武徳殿まで歩いて三十分程度の途中で、朝稽古からの帰りと思われる道衣姿の剣士達を目にする武者ぶるいさ。いよいよ剣道のメッカ、武徳殿に来たのだなと感銘すら覚える時刻である。

さて、平成十年大会には我が鹿児島県からの参加者、六段四名、七段二名、八段九名であった。平成二十一年大会では、六段二名、七段五名、八段十一名、八段挑戦のかかっ

ている七段の参加者激減が鮮明だ。ちなみに昨年の八段審査には東京会場で一次に二名が合格し、二次で二名共不合格だったと聞いた。彼らも昨年の京都には姿はなかった。昨年は十一年ぶりに見取り稽古をしっかりとやろうと、意気込んで行ったが、朝稽古を観ることも出来た。大部分の方々は帰路についていたが、まだ大会開会前の時間までは早かったからか、熱気ムンムンの稽古を観ることが出来たのはうれしかった。

元立ちに倉地（北海道、山城（北海道）、脇本（東京、菅崎（岩手）、千葉（奈良、藤原（広島）、一川（熊本、安永（静岡）の八段陣が立って、七〜八名が並んで懸かっていた。残念ながら鹿児島島の八段は元には立っていなかった。一時間近く観た中で感じたことは、皆さん間合いが近い。従ってスカッと捨てた切った打突がなかなか見られない。十年前の八段の先生方は、相手を攻めて、よく遣っていたと思うが、その日の稽古ではそれがなく、互角にしか見えなかつたのはどうしてだろう。中結いを双方が通りこしての間合いで打ち合いをしているとしか見えなかつたのは残念だった。特に八段の先生が相手の竹刀を上からたたき落とそうと、たいたいた事には驚いた。竹刀だからあれが出るが、竹刀は「日本刀」であるのだから、たたき落とす事そのものが出来ないはずなのに。品名が問題だ。平成十年大会は九段審査の最後の大会だったと記憶している。その九段審査の一組に児島八段

（鹿児島）対浦本（熊本）の一戦があつた。目を凝らして見入ったことがなつかしい。打ち合う場面はなく前半は児島八段の気攻め厳しく、浦本八段が後退。あそこで一本打つたら、と思つて見ていたら、その後浦本八段の気攻めで逆の展開となり、児島八段の左拳が微妙な位置まで上がつた。そこでも打突は相互に出なかつた。短いような長いような立ち合いもそこで終わつた。残念ながら児島先生の九段位はなかつた。双方とも同じような気攻めで一本の打突も出ない立合は忘れられないものとなつた。

九段に昇格された先生は大坂の奥園国義先生、京都の井上晋一先生のお二人のみであつた。奥園九段は薩摩川内市樋脇町の出身。範士九段の部の組合せは九組あつたが、実戦は三試合だけで、その中の榎崎正彦九段（埼玉）対森島健男九段（東京）の一戦がいまだに脳裏から離れないような実にはすばらしい立会であつた。あの「榎崎のメン」の榎崎九段の攻撃を大いに期待していた観衆から大きなざわめきが起きたのはさすが。立ち上がつてから後退したのが何と榎崎九段で、攻めてからの初太刀一本の小手は森島九段だった。その小手打ちが見事に決まつた。その後数呼吸して、またしても小手から面と渡る打突も森島九段。とうとう榎崎九段の面は一本も出なかつた。観衆が全員唖然としたのも今もよく覚えてい

る。体調の良し悪しもあつたのか、観ている我々には全然わからないような両先生の立ち居振る舞いのすごさを教えてもらつたような一戦で後進の者への指針ではなかつたか。落語家の小さん師匠（範士七段）の元気な立会もこの大会が最後となつたし、範士七段の高津進先生（群馬）が立会中に突然前に崩れ落ち帰らぬ人となつてしまつたのもこの大会のすごさであつた。あれから十一年の時が流れ、二日間大阪から京都へ。鹿児島県の参加者も全て若返つていた。七段戦を観て感じた事は、朝稽古の状況と同じで、間合いがお互い深い。従つて双方が右回りか左回りをやる。攻めを勘違いしているように思えてならない。深間から打つて出ても不発になるし、審判の手は絶対にながらない。「始め」の声でお互いが一歩前へ出てから、それ以上出れない状態の中で打つて出ても、打てないし、後退しては格好悪いし、その心理状態が結局は右か左に回る動作に移つてしまう。最悪の状態である。特に少々の当たりでも審判員の手はピクリともしないし、先ず有効打突にはならない。まるで現在の中高生の試合と何ら変わらない。立ち上がつても相手を尊重し、自分の構えをとるのえてから前に出るのならまだ攻めにつながるだろうが、右や左に回つての打突では「不動心」などどこにあるのか、竹刀だからやたら打ちたがる。「日本刀の操法」と頭の中に置いてやつた人が何人いただろうか？ 従つて面や小手、突き技ではほとんど手は上がらなかつた。上がっているのは、面応じ返し胴を打つた人には一本と認められたようだ。応

じ返し胴は相手の剣が全然体に触れてないから勿論、有効打突だろう。七段の剣道がこんな状況だから八段審査は厳しいと思われののではないか。特に女子の七段が多くなつた事が目についた。しかし女子に八段はどうだろうか？ 男子との立会でも体力で劣っているから、動きも女子特有の動きでしかなく、「女流八段」ならともかく、全剣連の八段は女子には無理だろうと思う。また、やるべきではないと思つている。これは差別ではなく男子と女子とは剣道そのものが違うからだ。でもそんな女子に勝てない男子の七段は情けないし、みつともないと思つた。右や左に回りながら五本六本と無駄打ちや無理打ちをして真剣勝負と勘違いしている剣士が何と多いことか。だからこそ審判員の手はピクリともしない。普段の取り組み方が顕著に出て来るのも、剣道の面白いところでもあり、難しいところでもある。段位とか勝負のみを追いかけてたらこんな結果も出そうなのがしてならない。鹿児島島の八段陣の立会ももつと何か出来ないものかと恥ずかしさも感じた。その中でも範士八段の末野対なぎなたの砂川（女子）の一戦は双方共にすばらしい攻防の連続で面白かつた。末野八段の攻めてからの面二本と、なぎなたの砂川範士の諸手突きは見事に決まつた。教士八段の俣木（鹿児島）対宮原（静岡）は小手打ち二本で俣木の勝ち。その小手打ちも相手の面を引き出しての小手打ちだったから、同じ打突二本で範士に昇格した。ただ、

ち居振る舞いのすごさを教えてもらつたような一戦で後進の者への指針ではなかつたか。落語家の小さん師匠（範士七段）の元気な立会もこの大会が最後となつたし、範士七段の高津進先生（群馬）が立会中に突然前に崩れ落ち帰らぬ人となつてしまつたのもこの大会のすごさであつた。あれから十一年の時が流れ、二日間大阪から京都へ。鹿児島県の参加者も全て若返つていた。七段戦を観て感じた事は、朝稽古の状況と同じで、間合いがお互い深い。従つて双方が右回りか左回りをやる。攻めを勘違いしているように思えてならない。深間から打つて出ても不発になるし、審判の手は絶対にながらない。「始め」の声でお互いが一歩前へ出てから、それ以上出れない状態の中で打つて出ても、打てないし、後退しては格好悪いし、その心理状態が結局は右か左に回る動作に移つてしまう。最悪の状態である。特に少々の当たりでも審判員の手はピクリともしないし、先ず有効打突にはならない。まるで現在の中高生の試合と何ら変わらない。立ち上がつても相手を尊重し、自分の構えをとるのえてから前に出るのならまだ攻めにつながるだろうが、右や左に回つての打突では「不動心」などどこにあるのか、竹刀だからやたら打ちたがる。「日本刀の操法」と頭の中に置いてやつた人が何人いただろうか？ 従つて面や小手、突き技ではほとんど手は上がらなかつた。上がっているのは、面応じ返し胴を打つた人には一本と認められたようだ。応

じ返し胴は相手の剣が全然体に触れてないから勿論、有効打突だろう。七段の剣道がこんな状況だから八段審査は厳しいと思われののではないか。特に女子の七段が多くなつた事が目についた。しかし女子に八段はどうだろうか？ 男子との立会でも体力で劣っているから、動きも女子特有の動きでしかなく、「女流八段」ならともかく、全剣連の八段は女子には無理だろうと思う。また、やるべきではないと思つている。これは差別ではなく男子と女子とは剣道そのものが違うからだ。でもそんな女子に勝てない男子の七段は情けないし、みつともないと思つた。右や左に回りながら五本六本と無駄打ちや無理打ちをして真剣勝負と勘違いしている剣士が何と多いことか。だからこそ審判員の手はピクリともしない。普段の取り組み方が顕著に出て来るのも、剣道の面白いところでもあり、難しいところでもある。段位とか勝負のみを追いかけてたらこんな結果も出そうなのがしてならない。鹿児島島の八段陣の立会ももつと何か出来ないものかと恥ずかしさも感じた。その中でも範士八段の末野対なぎなたの砂川（女子）の一戦は双方共にすばらしい攻防の連続で面白かつた。末野八段の攻めてからの面二本と、なぎなたの砂川範士の諸手突きは見事に決まつた。教士八段の俣木（鹿児島）対宮原（静岡）は小手打ち二本で俣木の勝ち。その小手打ちも相手の面を引き出しての小手打ちだったから、同じ打突二本で範士に昇格した。ただ、